# 盲蛇杖

全

昭和廿八年四月廿日

# 盲安杖序

世の教あるゝ事ゝいつても皆若をめ事
樂を與ふる外なし言若ハもつく身は概若
年ゝ行るゝ中ゝ我の所の名れるきみあるに
敬ふハ人ゝ仁義を高ゝる事ゝ悪ハあゝ先
かゝ記あゝ次人の恵ハよく初るなゝ的作
乃をたゝしあゝまぬく学ゝ刻みめをひゝのん
事ゝ我形ひて心をたゝく書ゝつゝ先事

丘氏之記

むかし蒙ふ無縁うたれ縁ある心乃目やみを
助なく安さに導かんとするの盲あ杖とハ
いふなるやあるべし

安永七戌のとし初秋

堵庵

生死ヲ知テ楽ミアリ
流転

一

生死を知て楽しみあり

生死をしりて楽しみのこゝろをたのしむに
しるべし丈生まれ死滅のことわりをよく知るに
しられ〳〵年ふるやくる事かりしらぬ者をいさ
人々にさひくらいふ者たとへ浅ましき者みな大師目にたとへ給へ
実命下あさゆふ〳〵に世まろくしみとも空にたとへ給ひ
なりしこそゆくしに縁ありて色相そむくれど飛花
落葉のことわりとやうさ思ひ石火電光目のまへな
且元一世常住幻化なりとしれしはすこし家財をとゝのへよ
かけ出難のはなに入て法性実なることわりを持也
あへも此の世の常住の機ともしるべしとも幾年月を

苦患何ヨリ来ル
身ヲ愛スル心

捨身

まもりかたく思ひよりゆへに臆病のこゝろしこゝろひと
これしまふは身をおもふ人なりといふすこしも也かふ
身をわすれは苦患（くかん）はなきものにこゝろよわきものや唯（たゞ）
一通身を愛（あい）するこゝろよりおこりて我生涯（しやうがい）は
生死（しやうし）を志るとへ人かへりみ生死を志る時はこれをつら
道（たうり）を志しさうかをもて仁義（じんぎ）礼智（れいち）をなすことをしらす
の二字（にじ）にいふてもし生死の二つを知るはすてゝいふ
との説（せつ）をきゝ見へさるゆへ忠孝（ちうかう）やをのれを守（まも）りてし生死（しやうし）
を見わけて曲（きよく）なりとても唐（たう）の杵臼（しよきう）程嬰（ていえい）は二人
は死をもとめて一人は命（いのち）をもすてゝかまはす絶（たえ）
子教（きやう）をいろはしこうへして世（よ）をしらぬ弓（きう）



身命ハ天ノ自然ノモノナリ

本来天地一物生死ナシ

戦陣（せんぢん）のなかに出ることを生死（しやうし）を志るものなりは
主君（しゆくん）の恩（おん）をかへさんとて妻子（さいし）をもすてゝ身命（しんめい）を
助（たすけ）まかしむる身をわするゝものなかし家中（かちう）をなす
かするは俾（ひ）ことなかれ主君（しゆくん）の恩（おん）を思ふて身命（しんめい）を助（たす）る
ことはよく志りて我身（わがみ）と主君（しゆくん）のものゝかたちのなすにせ
つへよすなはち我身（わがみ）の安楽（あんらく）なすのせつなからつひにさる
一極身命（しんめい）を主君（しゆくん）のものとなすはふかきものゝこゝろ
しせんやゆうれあさゝかはりをしかふてこ
勇断（ゆうだん）をもてゝまもりてむかしより無為（むい）にしてむかしはまた
く生死（しやうし）をかくさうしとみるへし武蔵（むさし）の国（くに）太田道灌（おほたどうくわん）と
いふ人はかつて道（たう）理（り）をさしてを知つし武芸（ぶげい）の人なりける歌（さい）

一休ハ
も新たな
為門よ
り

道ニ入テ

離

元来世
常ノ世

尾張国
堂老タ
リ落送
来遊ナ
リ九月
四日ノ朝



後みてきゆりつまくつのの毛云ふ事よあ
しらふけこころのもつまりかゆ云ふさこそ命の
としかくあるもくあさ月と思りひとしたへ
蛟川新右衛門辞世ありとい舞ふ
のあつよ水死よりれいうそのゆゆへ八重そつい
まこと一休和尚のうこしいつく
こうしいへどとり一休こ海ふ毒つくへれ
ひとくのたのこうりかくうれ人もし
ちめハ海ふひの人なれとも
せしゆへより秘いうよ法とあんへ唯其
毒ふこうの事とれとむ毒とれよかゆや

こちもこちもつくこうふつくさ先こうこ死こすす
とこのあせこもこれとすそすこむかくすこいろ
毒の人のこりとこもこもやゆのこうこも住こる
蒙ふの世代中海ふこつふこうこ耳ふこり知へ
く元亨釈書ハ世ふの事とこわふこ亨
とこらハのこうこうあくんや弟の焼香ふ著
こくつこのこうふこ毒ふむこの身ゆ知くや
地水火風のこうれこんかつそかくとむこふさ
らふ我ふかわくこ空ふ著ルこるとハ空天我こま
とこうこ人こくこ空ふ海ここ事ゆくこあく
みこふ一箇の円毒こる見こ見こ見こ

なれば実に不屬一実に不つまつて四大とちりひ
さとり古人のいとく
寒の紙萬像主不遂実侍間
為相先生他言歌仙家

二

己と顧みる己とたれさへ多人多屬もいりて
さとりた己とたしへ初めりたるかわしたる己とたら
すたるく変れと知ることしたる己と実ふたしくさ多人へ
為方己ろ己と知たるて他と識るたるわとようん
たすあ法ふたるくたること言ものかいたることよ
ひ自己とたるしめるくたとなやまんとしたへる己ろ解
てしたりゆへたり百人我ふかるかたるくしたるなり

た百人のたるかるかるよりたるつとなる
よ人八万人とすると百人と指られ八百人もまたこ
人とたるくたゆへいりふといるよ海たこの人公すあ
ふたたるく方のよ海たるなるけるつたゆ分
つて己と知るくひたとふたるふ法海ふと人と己解事な
分たれ八たるしみ絶八たたひたとれまたわたふ
ふたとたるりふ海二六時中ひたるたるか
たるくりみるくたくしし海一世ふ人とりしい
へたとれまた成たるくふ人ふれなるくへ人くふ分のるくふ
たりたふ海人へたるふ人ふたるふ死すふ月とたるたる死
たるたるとつたれて万年の海りひとたんふるよ年月と

どうじ人がしたがふる貪嗔邪偽の心をもつてと
しろしめすのころちかをもつよ仁義といふまへに
て諂誑諂曲の心用ひ家職を業となして無益のこ
とをこのむもあれハひろくしをもつて他人のせめを
うれ我執つよくしろく人をおそれむつかしこのひかく
邪貪着しこころしふかくしてひがよこしまへ
をもひなきやう人分別これなりかなしく物のみにいひたるま
くまらと守るへ人をそしりばちあたるもの身の
心をつけよくハ家業をもちゐるをいふくわれんやは
こゝろ理義しろしひとをもれまうひつとしをいさまへ
まいるへしひとかたの理術守らぬ身のおんもしらぬまゝ

おもひもよらぬ年来なされしいさゝかハいはまさる
おしたがひしとの人おのれ色かたち僻に
しあり道ハあしくあしとハいふべし
まことハうちかくしかをいたつらにねがひていふハ仏神
よ邪説しく心得ところしたへし清浄無碍の心
をいれん人をみせよう仏神納受してまうさんや
まれつきの人の邪なる心ハ欲かくして心かくす悪疾
らちさかしきね邪なり仏神ハ正理をいはまし給ん
依怙をしれとさのみ人て諸々の悲をとすみ欲をもら
を邪るいかあしくて仏神これをうけたまわらんや
かへつて罰をかうむるべし仏神ハ廣大の慈悲

とかく貪瞋痴の三毒を離て苦海をこえ究
竟とおもはれける法のみちへおもむきて数の最上の
安楽のさかひにいたりしやうじんもはら吉事なり
わきまへなきものハ此理を知らずして欲ふかくさ
ひしく人にかせはしく瞋恚にほむらをもやし愚痴のふかき
まよひさまよひて己を忘れて闇にまよひぬれ
身ハ苦患を受る事をしらずさま〳〵にまよふ事を
やすからぬハ非をしり己をしりてまよひ
たとへ人ハ物を得て己をまよふ人ハ
海のせぬ物を海へ
らく

一 他の心によりて
たとへハ
他人の心を
なり

一二ハ天地ノ恩

遅兆からくなり古人のいはくさとりのまへの是非ハ是非ともに非なり悟ののちの是非ハ是非ともに是なりといへり此語に悔る事をつけく思ひくらべて心を練し古語によりて聖人になれましたく己をかしこくするべきものなり

三

物ごとに他の心によりてする趣の事

物ごとに他の心によりてすれハ人をうらみしる事なかれまつ上
四恩をしるべし一ツにハ天地の恩二ツにハ師の恩三ツにハ国王の恩四ツにハ父母の恩なり天地の恩とハ人四大と云ハ地水火風なり大地よりまかせ物を作り生じて食物水火家衣類臭等皆天地の恩なりかへりて

あつへうしん師の恩しいつくしみ深ひの教主三世諸仏
苦患とくるれ輪廻の業とまぬかれ仏果をいとうる
無上法のとうへの恩いつくしみ深ひ四季の
恩しいつくし乱世にてくに人民苦しみとこれ
城狼藉の悪霊あれ人らく毒の通路をなし
らん豆和合の油あるくあるうへ色とりふくさ
なうう鬼畜ようしるあるうへ色とりふくさ
をうひ改名面さ代しれう仁義又常を
とこかれ法民の色面路めくまるうへ
通ようの一身れ悪とろう色とくく渡世
れいしれくるくあり自然なりひ悪酒とうくさら

じや父母の恩しいつくし母の胎内よりあとり十月の
苦患とりひまれいそりより豆和乳哺ゆう
いくよ色依法うくしなせ恩つくしの母
恩をなしよんくさりあるさ農人の恩
法職人の恩衣食物産の恩商人の恩一切の不足た
ひよおひくとけらう恩たうかこれとそて
人と和うつくしまくへう他の色職能
愛和一されう人よひうくしたいう人の色あくさ
つくく我とくるひのいくしくうくれ下人よひう
くれ下人の色あいくうくれ百事苦くしも日
和色沈あくく慈悲色家とうもひ身のれ

こうのなかにとられて
百姓不安堵のいとなむ
俗りいろ〳〵国土の人民と中たつふ一類の者
百〳〵其うひわるうしいるる
ふかい程うしひ物のうへ一人の名れとうく数ゑれ
春屬と養ひ口とうれ物命とうめうしいへうこと
食物とうりくくうくうひつうう年貢情ふ
そうふかりて書よとういうこなうつ
ふとをひようかひ思ひやう程一人世ふとうは
出てうう人書よとうこてこ口ふ
らうとうくふひうこうこうへうひこの人よ



てみよ海ふ水へ乞食飢寒れうもひよこうこみ水の
ふ一生流遠るる程不便ふわうしたやう
いうけうれをの科なれ家ふ毎れ
とれとーいうひるうこうへうれうれ心すえ
ら月乞紙と紙へ屋ふひしこなるとふりとれ
うこのれふひを七倩ふるとうこれ
名歌と如ふうこ月どうこ
物ふうれう家ふしふふ世ふ思りや
きひ切ふうへ一乞うこれとあうれまうこ
海ふ殺生と好ひうこ仁のうれ世へうり程命へ
殺生ふりふ我命れとうきうこ

ちのさとさ虫よりいとあるいみよ
思ひ夫婦と称ること命と惜しことひとよ富貴
もてこんとりを海さりうとれてこちら海へ興
聖人とうへとしけ道理とまり書に海行生る
人間我執つよく命とおもひしかりかり況
や君臣一番の富貴よりとやうこと富貴
うしん為してこんのうもひとれ万物和合する
としてとびて真を心とすいつも成自然といん
や君臣のまこうくいん人我の海てきいれる人の
まこくいん自然の発明なりさうれふ海とれ
人かうけと先しきく懐を悔て釋尊の三界

の苦とつれてこうまふかりかる
あけちまさにわるこれ一如れかるく万法と
つ海ものと人天上れ一月万ふ物るこく人く
れ性ものこれふこれれたれやし和ふを
の色れ和これ和ふ一切所生と意
色仏性の理とれこ海和一こうふ
海ちこくの意を新と得てくこ海月和

四

信ちこく忠孝と勧し和ふ事
信ちこく忠孝とれこ君れふこうこと海
これ擬ひこ人の四ふ叫ひてこうこ海
へこ人海りとを海こたこ人一唯我方

よからぬめんをもとめれはなさけなくあさく貪(むさぼ)るこころあ
れハいつわりたまへし実(まこと)の無礼(ぶれい)なることをしらぬなかて
縁をとかく悔ることなし或事(あること)をしれいかなるを誠(まこと)と
いふこと知らハ譬(たと)へハ我子(わがこ)又ハ愛(あい)せしものをたのまれしを我
身も悔をおもてしみよりみをしらしむ人の子(こ)を我か
愛(あい)すれともなにほとも悔しもたのまれハしらしむことなか
れ志らしむ忠孝(ちうかう)の道(みち)悔ことしあるかくるとも
忠言(ちうげん)をすすみ或死(ぞし)をいとひ名利(みやうり)をかへりみされ
ものためにするへしさかしふ深(ふか)くすれともしめて
不所(ふようじやう)ともむかし縁(わ)のみぬ事もかし或(あるい)ハ人
と好悪(こうあく)とありて人の心さしとうかんこと

とおもへハこれひとへに義(ぎ)とおもひして欲(よく)をかまよう
せしむると勧(すすむ)るゆへなり忠(ちう)をつくさハ
なんぞ我か身(み)をかへりみん義(ぎ)をしらは武勇(ぶゆう)を
おこなはなんぞ人とわしらんや一命(めい)を国土(こくど)に
すてて死を何人ハ悔ることなかりし天命(てんせい)なるハ
のちたすまてを義理(ぎり)のためにハ則時(そくち)に命(めい)をすつ
るハへきのことなりされハ義理(ぎり)ありしとりにことあ
らんや此理(このことはり)をわきまへて我か身(わがみ)に執着(しうちやく)し
悔ことのなきすに世へに迷(まよひ)をいてあしこしそしらハ苦(く)に
うつしひとをかさねくもかなしく三途(さんづ)の古郷(こきやう)にも
とまる事しあきほしたまわしもしやへしと生(うま)れ

あらしの中の町よ義とはりとおもへん
己れのみこれまことに道よ入理一とうるかい
かの世の人のこころ花とこころよたりまの相かうう
あをうとんと我しつる方のうたとといたたひとら
ひとこ愛のこうのりとどこれも歌をもひよみら恵花を
ひ中のあるまりてみこうりかの我とこらとひわこひ
のこたりの作をこうるまこうかるとこをのん
とつとこうこうんや縁ひ恵こ人よ作へての
うこうこうかくこをあ人の科よりひ世
の我の業因と観せてよ那てこらびかあこひ或ハ
一生病人とかりまこ青自悪人とかくこ報多こう



ひへとかり　あーのものハ唯とうとりとうこむ
やひとへよ我とうをりうへもくあるまる事ハく
ひんーと新不ちくこ花養れこうよ入理ーまこひ
のかーの海う海うくこ書よと思りつよあこれこも
くあるもこうこ花とこやと思りよこのか
ひてもくあこーこれハ海ようひまこうもしう
るあやこうへこもくこ作こ仁義と行ひここ
いるーめこるーこ海こかーこ光皆立寂よこへ
られこよ海まこまこ我こまこ世へなり十
二時中ーこ代とあくこ己れるひまこの道よ入ひ
海こへこうこ邪かーまこ乃へハ唯要ひの

人のうらみ　毎〻あり人は其まゝに仏
なりぼとけとこれはかたくあるもの人
ぜんげん
五　分限と見るべく其性〻と知るべき事
ぶんげん
分限とはけて其性〻とは
いうまでもなくこゝろつゝとつゝ人といふ
と思ひうるけとさいとしてあるとれば他のために
ひんぼうかつめして色やうこゝかゝ者れとこうひ者
しく方人よ海とまてあり　さ人とも性人を性
よまてしゆさるもあり毎〻そうゝとこなな
たものの人は義理成ちつゝ世よ教しひ人の
あさりとうこうそ身とうちみ身病ひとい



海しめかしあるこ通成まのひ賢なれとうゆ
知ちふ志ちしく志れ行さしひ仁義とよ
け家職とまもつゝ分とうし義万代
ものこうんこと切こ身の人は者と性しる
ふ知そ色ちしけこ海しひ仁義と海ひてまこ
ちあ名利と志ちしてひたちと志ち一
こひはとれてこう人は義理と者しけこう人は我
むこものとあれむ色あ也ま人のう也ひ
とうりんひちつゝきを中を我ひよやゝ機よ
ちこふとのしちちてちこうとう
あこ我こいうとあつて人ふ海こんこ

かけ物のゆへなり。ある人ハ碁将棊(ごしやうぎ)のわざハ
そのそらくハさらにほかりくらく人しれぬ分別(ふんべつ)をおそこ
まつかさこれしむしやく人の僻(ひが)ことなりまんするへ
碁将棊(ごしやうぎ)のわざ手あしきまけひとるをひろこし
うまりしかもまんやこれをとつておもへしいつま
の人もなきなかあしくせんとおもふもの二つ
たしかに我身(わがみ)をわするれなりおもとへ貧(まづし)
こゝろるさきのかくまひなるをとしさればの
のまへる限(かぎり)より人のくるしさすへいろく
こゝろのはたらき思へし立得(?)るわくれも
なるへしとおもふ一すじなるかにハ世にあ

ミな人かしきもひとしくなるをたのしむ人世にあ
とりしをふ　ハことに人のこゝろさうあ
らそひ人のハさに我ハさとりひさしきの
かけものへ一かくハしきことゆゑ世にあ
わしハ慈悲(ぢひ)ありて恥(はぢ)をしらしめあれた
めしものハゆるの人もみなみる馬(むま)牛(うし)八牛る
八(?)万(?)なれくれてらへあり非情(ひじやう)の木をもすこと
なすし麻(あさ)ハそのつうす蓬(よもぎ)ハそのつし海[illegible]
ふとりしるちなるもあり毒(どく)となるくさもあるを
是(これ)ハこのわけのえち(?)のめくみハ
らもこともそれくの差別(しやべつ)ありさ[illegible]せし

いつも我慢とおごりや偏なる頑愚一体なるこゝろ
と志るへし 舞か 其身ハさそれとなく
おもひの外にかゝる事なればこそ なからと
つゝしまれるがよろしいと

六

さて偏なる我慢をすてゝ御らうす
こゝろをかへてうけとられ 御よくりと志まし候
そこにおゐてまつりて前後を考へしていて事
志偏我のいかに文もんのうへと云かゝ小利を損な
あらしのことをり 志かれとも身のうへと志る人か
志れとかく 大かたハんとて思ひてこゝにあるところ
をもつきてあはようすれハ ことを案し出

是ハ碁の上手めんちやう目を借り前後を勘へ
きて十の内を捨てゝ十つかみとるよりハさ
らにかやうにあれ 志てく一目と打しく盤中の志らぬる
ところ是ハ余所へ我をかへすことかれハ愚人の
わざなりとこれをよくしれバまつかはしく今日すべく
こゝふりしてめて先わのこゝろをまれとかなしく偏さ
らん事をもしりを静にくすし里言安落入女ハ又
おのゝ心偏我く我執からしみゆるも
ちかき取悪気をなりとこれみ直とをいつまで人もかく
のこしたいかつてきまいかいはなしそのりしくとそ
なまじ氏民百姓へゆづつ村二村のあのこふたせとて

めく身上成て人名聞と悔ひくるれしとき
らひまつ侍の冥加ものしく口うるさく八十人百人
のあひだをとるれしとき
身上成て人名別悔ひてうめくひしをあつ
あ家ひまつ家の冥加をあつて書魚とあつて
ひ侍とのそしてけあつ
あつとう海鼠をふこかうといへとも海ふこかうと
色成んく着く然と富く愛敬の思ひとかと
いつくわつくつくうる人長岡ふくりて蛭とうの見
のかひとをかく きかつ
いつきのあか飢をせんやうもうの性ひつめり

貪欲こかく きつく人我の利ふく連ひの家人ひれて
せ飛とこしひ只利根かしてあわこ
こふとひ輪廻の業とかしく時人悪鬼こあつ
あをかく あをけとこれとそれつて
海こくこうれういかそ
か着をくらとあつ
結伝の母金花こ
文長人の伝ふ母人道かすひつうるひとつく雇
儀鬼毒ものとすみこ縁かをしひ
くかへて片時をひとみくあつ
いくとも見とこひくこめるく事とつくるひ

あらゆることの理をしりてハなをそれをさとりてのちある
わざはひもおこらぬハやはらかにこの理を知
つゝしみてとゞまれば自然ありて自由なる事多く
なにごとも行時もこゝろをしづめてすれば
そのよきをますます人みなよろこびつとめてよし
のちのこゝろはいはゆる人のためしにもなりてはてしまで
くるしみて落ることとなれ古語に云　千峰
劍嶽邊足下方破飯湯上清

## 七

己を忘れて己を守る事

己を忘るれば己を忘れさるまゝにも生ありて
利を思ふはいはゞ見かけをも忘れてわがみを忘るゝと

よく好むところにまかせて行ハ己を捨てたゞちに道をえん
のぞみも前後のことをもわすれて身命のをしからぬこと
をもしらずわがまゝにしてあそびをりおなじく己を
忘るゝとするにはたのしみをよろこびて目を忘れ他を忘る
あやうきことするは慾の我を忘るゝをよしとするにたゞさとる
まで怨むる心を仁と化しより来るにハ苦を楽とし
人を忘るゝ故に貪瞋邪見の念をもおこして悪業煩
悩とさゝれたる日を般若に忘るゝ時にはなをよく守
るべし一念の中にあけくれ一念の中には鬼あり一念乃
中には地獄餓鬼畜生修羅人天ありて経に云三界唯
一心心外無別法心佛及衆生是三無差別といへるなり

これハひがことなりしかめ善根と勧しるこれハ仏果に至
るなりと人々と語ふすることハ三毒の心濁ふ深く三逆
地獄に落入なりけるこれを思ふ上ハ人ハ仏とあてこ
とくこうこれハ人の師となるへしと所云
ふこうこれ人の罪悪道に引入るゆえにめくしまれ
いるのしむへきこれなりとそれもれてとそるへしこれ地獄
に入へきのあまさこれ船に乗りて大海と渡る云
海に出て西の罪額に出ることこれ日輪のごとくひかりの
やこさはし真のこまてこと角三つ出て牛の角ちへ
て高飛いつくよりやーるこれをの波のうへとあまつ
波に飛ぶりとそ流しきはこうりやくといふこと



船に乗て出たとれ出て高に
一人道心者をすすめ云波とうるこのうれし波等
百千合るこうをとそうきこ八万地獄に我とりて
ゆうしこれる我人の罪を波とうるやくとい八彼
地こそ拾こと共おそりとのうこと人と思ふ
人の中に悪業の罪を二万の苦悪こ八万四千の頭陀
をつくるこうるやうこ悪れ我ようこのうこと造り
こん悪いやうれてこうるこうよやうこ方ものとれ拾て
人と思ふ人こうこ一所に月とうこ人と
月とこうこしる月と思ふこうこ月のこうこれ
燃ゆる時のかしこ我と汁をん次の

## 八

[illegible]

## 九

[illegible]

(一)明くこころは分別なくしてよく分別するなり
(二)常くこころは つくづくの論分別なり
(三)殺とは[illegible]つくづくよく知めくとしるべし

有(あり)さましく悦(よろこ)びたり去(され)バ唯心(ゆいしん)の浄土(じやうど)己心(こしん)の弥陀(みだ)といへり彼(かれ)ハさることに仏念(ぶつねん)しぬるにしばしば今(いま)さらにわれ〳〵ハ只(たゞ)彼(かれ)つねにこそ勇猛精進(ゆうみやうしやうじん)をの勤(つとめ)なし釈迦(しやか)の念仏(ねんぶつ)せむ人ハ時節(じせつ)到来(たうらい)して終(つひ)に己心(こしん)のさとりを開(ひら)き則(すなはち)唯心(ゆいしん)の浄土(じやうど)に安住(あんぢう)すべし極楽(ごくらく)ハ西方(さいはう)を唯称弥陀導(ゆいしようみだだう)生極楽(しやうごくらく)といふこゝろなり ㊃

## 十 小利(せうり)を捨(すて)て大利(だいり)に進(すゝ)む事

小利(せうり)を捨(すて)て大利(だいり)によりてこれ一生(しやう)の行業(ぎやうごふ)我身(わがみ)を思(おも)ふ前(さき)しいまの世(よ)の人(ひと)も身(み)をすくふあまりにわが身(み)のことをのみ思(おも)ふ故(ゆゑ)に行住坐臥(ぎやうぢうざぐわ)勤(つとめ)て浄土(じやうど)に至(いた)る悦(よろこび)をも思(おも)ひら(ず)して名利(みやうり)にむさぼり着(ぢやく)を起(おこ)して身(み)を付(つけ)たるも

と思(おも)ふとも八結(むす)ぶまでも同(おな)じ迷(まよひ)の身(み)なりけりありがたき至(いた)ればれ人ハ皆(みな)このために身命(しんみやう)をもかけりて名利(みやうり)にふせて悔(くや)しけれ已(すで)に捨(すつ)べき大利(だいり)に至(いた)る者(もの)ハ小利欲(せうりよく)のために一命(いちめい)をもおしまれざる一生(しやう)の事(こと)をさとるや悔(くや)しき身(み)とならしめさる念(ねん)なればれ人とさとしく思(おも)ふ人そでさなすかられされバ先(ま)づ是(これ)を捨(すつ)る人ひとりして生(しやう)を結(むす)びてすくる三途(さんづ)の業因(ごういん)を結(むす)ぶ苦海(くかい)に浮沈(ふちん)する事(こと)ハ長夢(ちやうむ)の中(うち)の身(み)なる心(こゝろ)を住家(すみか)とせしなり仏説(ぶつせつ)云(いはく)一切有為(いつさいうゐ)の法(ほう)如夢幻泡影(によむげんはうやう)如露亦如電(によろやくによでん)応作如是観(おうさによぜくわん)識(しき)のみ幻(げん)のみ此(この)身(み)ある事(こと)を知(し)らぬ闇(やみ)として心(こゝろ)浅(あさ)く去(さ)る名利(みやうり)をやうと思(おも)ふとも小利(せうり)大損(だいそん)わさかつてし事(こと)仏出世(ぶつしゆつせ)なして是(これ)とすらひのへり仏祖(ぶつそ)の教(をしへ)に志(こゝろざし)て是(これ)時(とき)ハ大利(だいり)を得(え)ん

といつてこれ[illegible]三つめ〳〵是をもつて[illegible]三千[illegible]
世界しゐ色りひゞくら天面の主となりたつをいて大[illegible]
あわ〳〵況小世界をへ〳〵くるとや嘉云[illegible]〳〵涂海
一要業徹我生須臾如〳〵の〳〵教とられり眼とつの
てひ理あいく〳〵そいつるを大利といつをつ八三
界あ誰〳〵四羅上下南北東西を我地〳〵明[illegible]
窮三際後如十方如〳〵をを大利〳〵いつをり

京都書肆淡海荘右衛

羗應巳年初春吉日

開板着巳

弘所 京都 書林

二条通数屋町西入ル町
山中長兵衛

二条通柳馬場西入町
脇坂仙治郎

鳥丸通松原下ル町
すみ屋勘兵衛